

国民体育大会の是非についての研究

A study of The National Sports Festival about corporal punishment

1K05B198

指導教員

主査 友添秀則先生

福田 哲也

副査 宮内孝和先生

【本研究の動機】

私は、高校三年時に埼玉県で開催された国民体育大会(以下「国体」と略す)で優勝した。私にとってこの国体優勝は、非常にいい体験となり、今後一生忘れられない体験となるだろう。しかし、あれから4年が経過し、果たして国体は必要なのかという疑問を抱いていた。それは、開催県が必ずといっていいほど天皇杯を獲得することや長きにわたる選手強化計画、莫大な費用がかかる施設管理などの諸問題を知ったからである。そこで、国体がこれまでどのような歴史を経て、現在の国体に至っているのか。そして、これから国体はどのようなようになっていくか。どうならなければならないのか。私はこの点に興味を抱き、この研究を卒業論文のテーマとした。

【本研究の目的】

国体の歴史や開催することによって起こる諸問題を多様な面から考察し、国体のあり方や必要性を見出だす。そして、私は将来、教員になり国体に携わっていくつもりである。国体は必要ではないと疑問を抱いているが、これからも携わってきたいのでどうせなら国民にとっていい国体となつてほしい。そのために何が必要なのかを考察していき、将来国体に携わったときに役立てたい。

【本研究の方法】

権学俊の「国民体育大会の研究ーナショナルリズムとスポーツ・イベント」を中心に文献による調査。

インターネットからの情報も活用しながら考察し

ていく。

【第一章】

1945年、戦前から競技団体の要職にあった人たちが会合し、戦後のスポーツのあり方と競技団体の組織と事業について話し合うなかで全国体育大会の開催が提案され、翌年の1946年、理事会を結成。実施要綱が検討され、GHQの全国的な承認、政府から40万円の補助金を得て、「荒廃で娯楽を失った国民と青少年にスポーツの喜びを与え、日本国内に広くスポーツを普及させる」目的で第一回国民大会がスタートした。その後、大きな転換期を迎え、時代の流れとともにその時代に適応した大会として広く国民の理解を得るために、粘り強く推進している。

しかし、1990年代には多様な諸問題から国体廃止論が浮上してきた。そして、2002年に開催された高知国体では新しい取り組みが行われた。高知県がどのような改革に取り組んだのかについて考察していく。

【第二章】

国体には多様な諸問題が挙げられる。莫大な資金を選手強化や大会運営、施設管理に費やすこと。開催県が必ずといっていいほど天皇杯を獲得すること。マスゲームなどの練習によって、学校教育に弊害が生じていること。冬季国体の開催地が決まらないことなどである。

しかし、その一方で開催県のスポーツ振興に役立つという意見もある。国体は果たして誰のための何のための大会なのか。県勢誇示のためか。

国民のためか。多様な面から国体の必要性を考察する。そして、私自身、実際に国体に参加してみte感じたことを述べたいと思う。

【第三章】

多くの諸問題を解決すべく、近年、提言されているのが、「大会の充実化・活性化」と「大会運営の簡素化・効率化」を目的とした『国体改革2003』や「現状の冬季大会開催における問題について対応した一連のあり方や方向性を明示す

るため」に提言された『冬季対応プロジェクト』である。

果たして現状はどうなのか。これからいい方向に変わっていくのか。それとも今までのままなのか。この改革に対する関係機関のアンケートなどを元に今後の対応策を練る。

【結章】

本研究のまとめをし、これからの国体についての課題や提言をしていく。